

# 権力の修辞学

——「ウェールズの魔術師」と戦時内閣——

岡田 新

## The Rhetoric of The Power

— ‘Welsh Wizard’ and The War Cabinet —

Shin OKADA

### 1 はじめに

1914年6月28日、サラエボ(Sarajevo)で起ったオーストリア・ハンガリー帝国の皇位継承者フエルディナンド大公(Archduke Franz Ferdinand)の暗殺事件から、戦争は始まった。それは一ヶ月余りでロシア、ドイツ、フランス、イギリスを始めとする列強を巻き込む世界大戦に発展する。アルプスから大西洋岸にまで伸びる塹壕が掘られ、数メートルを奪い合う凄惨な戦場が、無数の兵士たちの命を飲み込んでいった。激しい戦火と際限なく消耗する弾薬、夥しい屍の山に直面し、自由主義の祖国を標榜していたイギリスも、国民を死地に駆り立てる徴兵制を敷き、国のあらゆる力を結集して戦う総力戦(Total War)の体制を構築していった。その中心にいたのが、かつてボーア戦争(The Boer War)で反戦の旗を高く掲げた「ウェールズの魔術師」(Welsh Wizard) ロイド・ジョージ(David Lloyd George)である。そして1916年12月、ロイド・ジョージは、盟友アスキス(H.H. Asquith)を首相の座から追い落とし権力を握る。それは総力戦の力学が、「自由主義の時代」の残影を粉碎した瞬間であった。

アスキスとロイド・ジョージは、20世紀初頭の自由党の再生を支えた両輪であった。二人は出自も全く異なっていた。<sup>(1)</sup>「待ちの政治」(wait and see)をモットーとするアスキスの政治スタイルは、炎のような雄弁で政敵を攻撃するロイド・ジョージのそれとは対極にあった。しかし第一次大戦前の自由党政権で、二人は首相と大蔵大臣として緊密な協力関係を築き、人民予算(People's Budget 1909年)や国民保険法(National Insurance Act 1911

1年)、議会議法(Parliamentary Act 1911年)等、歴史を画する社会改革、政治改革を成し遂げた。エドワード時代の自由党の再生を草の根で支えたのは、自由党と労働者との「革新主義同盟」(progressive alliance)であった。<sup>(2)</sup>他方、権力の回廊で自由党政権を支えていたのは、この二人の協働であった。徴兵制をめぐる自由党内の亀裂が露わになった時でも、アスキスは「もし我々が争えば、それは災いを意味する」とロイド・ジョージに書き送っていた。<sup>(3)</sup>

それゆえ1916年12月にロイド・ジョージがアスキスを首相の座から引きずり下ろした事件は、エドワード時代の政治的構図はもとより、19世紀以来のイギリスの政党政治のあり方を根底から覆す地殻変動の始まりとなった。<sup>(4)</sup>この事件を起点として、自由党はロイド・ジョージ首相率いる連立派と前首相アスキスに反連立派に分裂し、両者は1918年総選挙で激突する。1886年に自由党はアイルランド自治をめぐる大分裂した。30余年を経て、自由党は再び決定的な分裂を経験した。

筆者は前稿で、第一次大戦の開戦時から徴兵制の導入までのロイド・ジョージの弁舌を、1918年の総選挙のプレリユードという観点から辿った。本稿では、1916年12月のアスキス首相の退陣と戦時内閣の誕生に臨んだ「ウエールズの魔術師」のレトリックを組上に載せた。<sup>(5)</sup>前稿で論じたように、開戦に当たってロイド・ジョージは、第一次大戦を小国を守る「聖戦」として位置づけ、総力戦を平等主義的な「新しいイギリス」(New Britain)を造る機会として喧伝した。では彼は、アスキス首相からの権力の奪取をどのような論理で正当化し戦時内閣を造ったのか。本

稿では彼が紡ぎだした言葉を、政治宣伝という角度から捉えてみたい。前稿と同じくこの稿の焦点は、ロイド・ジョージの伝記的事実の発掘や、戦争の指揮の巧拙にはない。この稿の目的は、戦後の総選挙の長い前哨戦という視点から、国民向けの彼の発言を吟味しようとすることに限られている。

## 2 「労働党の決意」

1916年の後半には、アスキスの戦争指導に対して自由党と統一党(Unionists)<sup>(6)</sup>の中で不満が膨らみ、アスキス連立政権の行く手に暗雲が立ち込め始めた。1915年3月に砲弾不足のスキヤンダルが顕在化した時以来、統一党内にはアスキスへの不満が鬱積していた。1915年5月にアスキスは、自由党の単独政権から統一党、労働党との連立政権へ梃を切った。これもウエストミンスターの政界に燦る不満を抑え込むことを企図したものだ。しかしその後も徴兵制の導入を逡巡するアスキス首相に対して、統一党ばかりでなく、軍需相として辣腕をふるっていた自由党内のロイド・ジョージも次第に苛立ちを募らせていった。

1916年秋、ロイド・ジョージは動き始める。この年の7月、ロシアに向かう途上で海の藻屑となったキッチンナー(Lord Kitchener)に代わって、ロイド・ジョージが陸軍大臣に就任した。<sup>(7)</sup>しかし1916年6月から11月に行われたソンム(Somme)の戦いは、イギリス軍だけで40万人を越す犠牲者を出したが、戦果は乏しかった。一方大西洋上では、1916年6月のユトランド沖海戦(Battle of Jutland)の後再開されたUボートによる商船への

攻撃が、イギリスへの食糧供給を脅かしていた。一向に戦況が好転しない中、ロイド・ジョージは、ますます「無気力」になるアスキスを日々の戦争の指揮系統から外し、総力戦を断固として遂行する「命令する権力 (dictatorial power)」を持つ<sup>(8)</sup>「少数の戦争委員会 (War Committee)」を設置する構想を練り始める。

11月25日、野党リーダーのカーソン (Edward Carson)、植民相ボナ・ロー (Bonar Law) とロイド・ジョージは、戦争委員会の設置構想のメモを作成した。この構想をめぐって首相アスキスとの間で緊迫したやりとりが続き、一旦妥協が成立したかに見えたものの、結局決裂した。12月5日、ロイド・ジョージは、「今のやり方を続けば……祖国を救うのは手遅れになる。」これを「国民に伝えることが義務」である、とアスキスに書き送り、辞任を申し出た。<sup>(10)</sup> 辞任の手紙でロイド・ジョージは、政策をめぐってアスキスとの間にこれまで「多くの深刻な相違があったが、一度も口論したことはなかった」と認め、アスキスの「好意と親切」に感謝する一方、「行動を伴わない結束」は「無益な殺戮」以外何物でもない、とそのリーダーシップに異を唱えた。アスキスはなお、自らの手で内閣を再建しようと試みた。だがボナ・ローの下に集まった統一党の閣僚らは、戦争委員会の設置がなければ協力できない、とアスキスの辞職を求めた。海軍大臣バルフォア (Arthur Balfour) も、ロイド・ジョージの構想に賛意を示し辞任を申し出た。さらにインド省長官オースティン・チエンバレン (Austin Chamberlain) にも、ロイド・ジョージとバルフォアが辞任するなら、政権を維持するのは難しいと返答した。追い詰められたアスキスは、ついに首相を辞する旨を国王ジョージ五

世 (George V) に伝えた。<sup>(11)</sup>

国王はまず統一党のボナ・ローに組閣を託した。だがアスキスがバルフォアやボナ・ローの下で閣僚に就任することを拒絶し、ボナ・ローは任を果たせなかった。かくしてロイド・ジョージに組閣が託される。自由党の閣僚は、アスキスに忠誠を保ち協力を拒んだ。だがロイド・ジョージは、外務大臣を引き受けたバルフォア始め、統一党の幹部から協力を取り付ける。さらにロイド・ジョージは、労働党からの支持を確保、加えて自由党議員の半数にあたる136名の支持も得て、遂に首相の座を手にする。<sup>(12)</sup> 史上最も長く宰相を務めたアスキスは、自らのプロテジェエーにその座を奪われたのであった。

この劇的な政変を可能にしたのは、まずボナ・ローやバルフォアら統一党幹部が、ロイド・ジョージの急進的思想を厭わしく思いつつ、のつびきならない戦局を開戦するため、アスキスを捨てロイド・ジョージを選んだことにあった。<sup>(13)</sup> カーソンと共にロイド・ジョージと戦争委員会の構想を練ったボナ・ロー自身が、戦争に勝利するためには政権の抜本的な改革が必要だと考えていた。もともとボナ・ローには、アスキスの地位を脅かす意図はなかった、とされる。しかしアスキスが、ロイド・ジョージと決裂すると、アスキスと決別する他ない、と臍を固めた。組閣を依頼された時、ボナ・ローは既にロイド・ジョージこそ「最適な首相候補」だと国王に告げていた。<sup>(14)</sup> ロイド・ジョージが率いる連立政権が誕生した後、蔵相を引き受けたボナ・ローは、首相と毎日官邸を行き来する緊密な関係を築く。ロイド・ジョージは、「比類のない実務的な批判の才能の持ち主」とボナ・ローに賛辞を送り、二

人は「政治上最も完璧なパートナー」(ポールドウィン Stanley Baldwin)と呼ばれるに至る。<sup>15)</sup> 一方1902年から1905年に首相を務めた統一党の長老バルフォアも、ロイド・ジョージの政治的信条にはことごとく反対だ、と公言しつつ、「官僚的形式主義の壁 (red tape) を取り除ける唯一の男」だと評価し、戦争を仕切る政権を「ロイド・ジョージが試みる」ことに賛同した。<sup>16)</sup> ボナ・ロー

から外務大臣就任を打診するロイド・ジョージの伝言を伝えられた時バルフォアは「自分の頭に拳銃を突きつける」ようなものだとこぼしながら「直ちに承諾した」。<sup>17)</sup> 7日の夕刻、チェンバレンやカーゾン等、アスキス連立政権の統一党の閣僚達は、陸軍省でロイド・ジョージと会談。少人数の戦時内閣の設置、労働党との協力、アイルランド問題の処理等で合意し、文書でその記録が作成された。そこには、チャーチルやノースクリフ (Northcliffe) を閣僚に登用しないこと、ヘイグ (Douglas Haig) をフランダーズとフランスにおける最高司令官から更迭しないこと、といった条件がつけられていた。ロイド・ジョージは直ちにこれを受け入れた。<sup>18)</sup>

しかし自由党の半数が協力を拒んでいる以上、国民を総動員するに相応しい政権を作れるかどうか。それは労働党にかかっていた。ロイド・ジョージの政権に協力するべきかどうか、労働党は議論の渦中にあった。労働党党首ヘンダーソン (Arthur Henderson) は、党の全国執行委員会の審議の前に、ロイド・ジョージと労働党の代表団が会談することを望んだ。12月5日、労働党の代表40名が陸軍省を訪れる。この会合でロイド・ジョージは、労働党を政権に引き入れるべく熱弁を奮った。回想録に収録されたこの演

説は、連立政権の成否が「労働党の決意」にかかっていたことを浮き彫りにしている。

まずロイド・ジョージは、「私は戦争を憎む。戦争を忌み嫌っている」と切り出す。これは「悪夢なのではないのか」「現実とは思えない」と心情を吐露する。「しかしこれは戦争に入る前に問いかけるべき問題だ。……一旦戦争に突入すれば、屈せずやり遂げねばならない。」とロイド・ジョージは畳みかける。そして名前こそあげなかったが、アスキスの手ぬるいやり方を手厳しく槍玉に挙げた。「戦争における遅れは、病氣と同じように命取りになる。

……今日国民の命を救うことができた軍事行動も、一週間後にはもう遅すぎる。」「我々の戦いは遅く、躊躇いや動揺があった。然るべき決意とスピード、仮借のなさをもつて闘ってこなかった」直近の課題は、政府の立て直しにある。「国王陛下は、包括的な挙国一致政権を樹立する計画に、すべての政党を束ねることができなかった……そして私に政権を造るように求めておられる。」「陛下の政府は、続けねばならない。戦争を遂行するには、政府がなければならぬ。」「今この国が求めているのは、効率的に戦争を遂行する政府だ。それこそが今求められている。」そのためには、労働党の協力が不可欠だ、とロイド・ジョージは訴える。「平時であれ戦時であれ、労働党の支持、いや労働党の協力なしに、どんな政府もこの国ではやってゆくことはできない。すべては、戦争に勝つのを助ける労働党の決意にかかっている」。<sup>20)</sup>

そして労働党が政権に加わる具体的な条件として、少人数で戦争の指揮を執る戦争委員会に、労働党が直接加わることを提案した。それは「(労働党が政府に) 従属するためではない。そうでは

なく、労働党が本当に戦争委員会で責任を共にし、戦争を指揮するためだ。」「この国の生命と成功がかかっている会議。その会議で、労働党が平等に重荷を分かち合い、貢献すべく……労働党が恒久的な代表を出すことを提案する。」<sup>21)</sup>

さらに新しく設置する労働省と年金省の長官に、労働党の代表を就任させるよう求めた。「他の省にも労働党の代表を置くことを提案する。今まで省のトップに労働党の代表はたった一人だった。」「商務省 (Board of Trade) の労働局と、軍需相の労働局を一人の長の下に統合することが必須だ。この省は、政府の中で最も重要な部局になるだろう。なぜなら、平時に労働省が如何に重要であるとしても……戦時にあつては、労働省はほとんどその倍も重要だからだ。それは労働省であると同時に、戦争省である。私はこの労働省の長に、労働党の代表を置くことを提案する。」加えてロイド・ジョージは、年金省の新設を打ち出し、労働党の代表をその長に据えることを提案する。「私が造ることを提案しているもう一つの省がある。何十万という家庭に影響を及ぼし、更に何十万人の生活に影響する問題を扱う省だ。年金省のことだ。この省がどれほど重要で、ずっと重要であり続けるか、考えるまでもない。この省もまた、他ならぬ労働党の代表に預けることを提案したい。」

労働党から二人の次官、院内総務を加えることに言及した上で、ロイド・ジョージは、新政権が取り組むべき政策面の課題として、炭鉱と海運（および造船）、食糧生産をとりあげた。まず炭鉱について、ロイド・ジョージは、「一つしか解決策はない」と言い切る。それは「国家が炭鉱を管理する」ことだ。もちろん「国民の

犠牲で利益を得るのは許されない。利潤は、戦前を基準として計算される。」さらにロイド・ジョージは、個人的には「船舶（海運と造船）についても、同じ方針に強く賛成だ」と言葉を継ぐ。戦争に乗じて法外な運送料をとって大儲けしている業者がいる。「こうしたスキヤンダルに対処しないまま、政府が物事を進めてゆくことはありえない。」<sup>22)</sup>

最後に食糧増産について、ロイド・ジョージは、活用されていない耕地が多すぎる、と問題を提起する。「これほど多くの見事な土地で何も生産されていない国が世界にあるとは信じられない。」「少なくとも戦争の間は……食糧生産ができる土地は、最後の1インチまで、活用されなければならない。」「農業の生産性を上げるための機械化、農業労働者の動員を彼は呼びかける。「第二に、耕作のための多くの装置なくして」食料の増産はおぼつかない。例えば機械で駆動できる鋤がどれくらいあるのか。これを確かめ「可能な限り最大限」それを稼働させるべきだ。軍需省は農業機械を量産する体制をとり、軍隊と同様人員を「農業労働にも動員」しなければならぬ。さらにロイド・ジョージは、イギリスには10万人の熟練した園芸家がいると指摘する。潜水艦の攻撃が続けば、食料供給が逼迫する事態が起ころうる。その時には園芸家の「すべての力を食糧増産のために使う」のに反対する人がいるだろうか。これができれば「食料を自給することができない村があるとは信じられない。」イギリスは「完全に食料を自給できなくとも、それに極めて近くなる」ことは可能なのだ。<sup>23)</sup>

だがそれには「一つ条件がある、とロイド・ジョージは宣言する。すなわち「配給をしなければならぬ。」「もし配給をしなけ



ればどうなるか？」と彼は問いかける。「金持ちは常に自分の好むものを買える。しかし金持ちが買えば買うほど、他の人々のための食料は少なくなる。……下層の人々は、公正な分前よりさらに乏しい食料しか手に入れられなくなる。」そこでロイド・ジョージは、カトリックが復活祭の前に行う習慣にならい、配給制による「国民的断食 (Lent)」を呼びかける。「配給制による国民的断食の制度は、戦争の恐怖が続く間、自らの家で苦しみに耐えることで、いくらかでも戦争に貢献していることを人々に感じさせる。」「あらゆる人が、なんらかの損失に耐えねばならない。」だから「明確で完全な配給制が導入されることを求める。」「すべての人が同じ立場に立つ」<sup>(24)</sup>配給制こそ、国民を結束させるからだ。

こうしてロイド・ジョージは、労働党を、ひいては国民大衆全体を、総力戦体制の主役として総力戦に取り込もうとした。1914年に国家の管理下に置かれていた鉄道に続いて、炭鉱や海運の国家管理を次々に打ち出すとともに、配給制による「犠牲の平等」を謳った。それは開戦時に打ち上げた平等主義的な「新しいイギリス」の構想の具体化であり、「戦時社会主義」とも言われる経済の国家管理の劇的な拡大を図ったものだった。<sup>(25)</sup>

この会見は成功裏に終わった。フランシス・ステイーブンソンの観察によれば、ロイド・ジョージは、「極めて巧みに」(at his craftiest)労働党の代表達の心を掴んだ。「多くはむつとりと敵意をもってやってきたが、愛想よく笑いながら帰っていった。」<sup>(26)</sup>この日の午後、労働党全国執行委員会は、18対12でロイド・ジョージを首班とする連立政権に加わることを議決する。回想録でロイド・ジョージは「労働党の決定は、真に国民的な政権を造る私の

任務の成功を保証するものだった」と述懐している。<sup>(27)</sup>

### 3 「命令する権力」

議会の支持を固めたロイド・ジョージは、総力戦を戦い抜く少人数の司令塔の構築に着手した。それは圧倒的な権限を持ち、迅速に行動できるものでなければならなかった。<sup>(28)</sup>少人数からなる戦時内閣は、結局数人の「独裁者 (dictator)」の政府ではないのか、と労働党の代表が問うた時、ロイド・ジョージは開き直ったかのようにこう答えている。「政府は、命令する (dictate) 以外、何のためにあるのか。命令しなければ、政府ではない。23人か4人かの違い。それは4人が23人より時間を食わないということに尽きる。」戦争の司令塔が少数人数であるべき「唯一の理由」は、「人数が多くなることは……あまりにも多くの心、多くの舌、多くの混乱、多くの遅延を意味するだけだからだ。」<sup>(29)</sup>かくて当初構想されていた内閣の下に置かれる戦争委員会に代わって、彼自身とボナ・ロー、カーズン (Lord Curzon)、ミルナー (Lord Milner)、ヘンダーソンの5人からなる戦時内閣 (War Cabinet) が設置された。戦時内閣は、内閣の持つすべての権限を自ら行使できた。そして労働省、年金省、兵役省、食糧管理省、船舶省が新設され、労働省と年金省には、約束通り労働党から閣僚を充てた。さらに兵役省、食糧管理省、船舶省には職業政治家でない外部の専門家を登用した。特に教育省には、シェフィールド大学の副学長だったフィッシャー (H.A.L. Fisher) を任じた。加えて戦時内閣を支えるため、秘書官からなる内閣官房 (Cabinet Secretariat) が創設され、それを取り仕切る官房長に、ハンキー (Sir Maurice Hankey) が任命され

た。首相官邸と大蔵大臣官邸の庭に仮設の建物が造られ (Carden Suburb)、昼夜をわかつず稼働を続けた。また庶民院のリーダーが新たに設置されてボナ・ローが任命され、議会の日々の運営から首相を解放し戦争に専念できる体制が整えられた。<sup>30)</sup> 戦時内閣の閣議は、週日毎日開催され、史上初めてその公式議事録が作成された。<sup>31)</sup>

12月19日、ロイド・ジョージは首相として初めて議会での演説に臨む。2時間に及んだ演説の内容は、労働党の代表団を前に語ったものと重なる。だがそれは、国王に任命された首相としての施政方針演説であり、自由党のアスキスらとの決別を公に告げる宣言でもあった。演説の冒頭、彼はまずフランスとロシアがすでに拒絶したドイツによる講和の呼びかけを一蹴した。「我々は戦争をある目的のために受け入れた。価値ある目的のために。その目的が達成された時に戦争は終わる。」というリンカーン (Abraham Lincoln) の言葉を引き、ドイツが奪った土地を返還し、誠実に賠償に応じ、二度と再び戦争を起こさないことを保証しない限り、講和に応じることはできない、と戦いを続ける決意を強調した。今求められているのは、「勝利までの道のりがどれほど遠く、その旅がどれほど苦しくとも、……我々の国家のすべての資源の動員を完成し、さらに効率的にそうすること」である。もし「素早い勝利を新しい政権に期待している者がいるとすれば、失望する運命にある<sup>32)</sup>」と厳かに警告した。

一方ロイド・ジョージは、徴兵制で招集された新しい軍隊に期待を込めた。今イギリスには「新しい軍隊」がある。「1年前にはそれはイギリスそしてアイルランドの地に埋もれた鉱石だった。

……それが今や鉄になった。溶鉱炉の炎をくぐり、素晴らしい鋼になった。それを敵は知っている。」「この新しい軍隊、新しい男達、新しい士官、新たな任務についた將軍。彼らは、世界で最も強大な陸軍、世界がかつて見たことのない強大な陸軍、最高の装備と最高の訓練を受けた軍に立ち向かい打ち負かしている！戦闘に次ぐ戦闘、毎日毎日、毎週毎週！人類の技術で建造された最も堅固な塹壕から敵を追い出している。(報告を) 読んでも信じ難い勇猛さで！」「フランスにいる我々の息子達の偉大な軍隊と同じように、国民が着実に勇敢に犠牲を払い、学び耐えるならば、究極の勝利を手に入れることができる。かつてなく私はそう確信している。<sup>33)</sup>」と叫んだ。

ロイド・ジョージは、新政権の特徴に話を転じる。まず首相と庶民院のリーダーの機能を分離したこと。これを取りあげ、戦時にこの二つの職務を同時に務めることは、「どんな人も担うことができない」と正当化する。続いて新しい政権が「先例から外れている」特徴を三つ数えあげた。第一の特徴は、実務を執行する権限を「ごく少数の手に……集中させた」ことにある。第二の特徴は、閣僚に「議会での経験ではなく、行政やビジネスの能力を持つ人物を選んだこと」であった。そして第三の特徴として他ならぬ「労働党との協力関係 (partnership)」をあげた。「生涯労働に勤しんできた男達、労働者の組織と、これほどまでに任を分かち合う政府。そんな政府がこの国を治めたことはなかった。労働党の無条件かつ完全な支持がなければ、戦争を遂行することは不可能だということを我々は悟った。戦争の進め方に、労働党の助言と助力を得ること。これを心から望んでいる。<sup>34)</sup>」

ロイド・ジョージは、少人数で構成された戦時内閣の仕組みを弁護する。これまでの内閣の制度は、平時のためのものだ。戦時には相応しくない。「川や運河を航行するための船は、外洋を航海する船と全く同じではない。……23人の内閣は、強風には船首が重すぎる。」「これ（戦時内閣）は、戦時にあらゆることに迅速に決定を下すのに最適」だ。これまでの戦争の進め方は「遅すぎた」、と彼は切って捨てる。「決定と行動が遅れたために、連合軍は災難に継ぐ災難に見舞われてきた。」多数の人々からなる指導部には、なるほど豊かに「知恵」があるかもしれない。しかしそれだけで戦争はできない。ロイド・ジョージは、すべての省の代表が内閣に列席するという慣例自体、歴史的にみれば最近のことだと言う。戦時には、各省だけに関係することは、閣外で協議する方が効率的だ。戦争委員会では常に公式の記録がとられていた。これに対し内閣では、従来公式の記録すら残されていなかった、と。（これに対しアスキスは、国王への手紙の形で首相が要点をまとめるのは「動かせない慣例」であったと言いつつ、ましく発言している。）<sup>(36)</sup>

他方ロイド・ジョージは、少人数の戦時内閣の形成によって「議会のコントロール」が弱められるのではないかという懸念をきっぱりと否定する。「議会のコントロールは、すべて、しかも常に最高に維持されなければならない、何故なら議会は、国民を代表しているからだ。議会の完全なコントロールを弱めるような試みは、どんな形ででも、全く存在しない。」<sup>(37)</sup>

そしてロイド・ジョージは新たに作られた組織の中でも、労働党の代表が長となる労働省を特に取り上げた。それは長年まさに

「労働組合運動が求めてきたもの」に他ならない。そして労働省を、軍需省で自らが実践してきた社会政策の延長線上に位置づけた。労働省は、労働争議を扱うだけではなく、「真の意味で労働者の福祉に責任をもつ」省とならねばならぬ。自らが設立した軍需省福祉局は今まで「より人道的な条件を産業に課し、惨めな労働をより良く変え、より健康で魅力的なものにする」よう試みてきた。軍需省福祉局で働いていた要員も、多数労働省に移ることに触れ、労働省が福祉局が切り開いた改革を受け継ぐことに期待を込めた。一方ロイド・ジョージは、労働省は「戦争のために労働力を動員する上で指導的役割を演じる」ものでもなければならぬ、と総力戦の観点から釘をさしていた。<sup>(38)</sup>

次にロイド・ジョージが取り上げたのは、海運、炭鉱等産業の国家管理の画期的な拡大である。海運を「頸の血管」に例え、「それが断たれば国民の命は破壊される。この国のすべての船を完全な政府の統制下に置くべく接収すべき時が来た。そう感じている……戦争の間、海運は言葉の真の意味で国有化されるであろう。」今海運会社があげている莫大な利益は、「多くの人々が国のために偉大な犠牲を払っている戦いの時には許されない。」そして国有化を通じて、更に多くの艦船の建造を迅速に計画する、と宣言した。炭鉱についても、それは「軍と産業の効率の本質的な要素」であり、「個々の炭鉱ではなく、産業全体について、政府がより直接的な統制を引き受けるべきだ」と論じる。<sup>(39)</sup>

同時にロイド・ジョージは、国民の「平等な犠牲」を繰り返して強調した。目下北米とイギリスの収穫は厳しい状況にある。平時においては、収穫の減少を他の国の収穫で補うこともできる。だ



が戦時にそれは不可能だ。しかもドイツの潜水艦が常に食糧供給を脅かしている。だから「国民は真の犠牲を払うべきだ、これを呼びかけねばならない。だが払う犠牲は平等であることが不可欠だ。」「富裕層の過剰な消費が、より恵まれない人々の食糧不足を招いてはならない。」「あらゆる種類の隠匿は、国民を傷つける。それは命をかけて闘っている国民を傷つける。」「誰かが食糧を取りすぎるために、どんな男や女、子供も飢えに苦しむことがあってはならない。」

全国民の力を総動員する食糧の増産が緊急の優先事項である。食糧の確保のために「すべての利用できる土地で食糧が作られねばならない。」そのために「その機会がある人は、食糧を作り共通の蓄えに貢献することを、国家への義務と考えねばならない。」「それは犠牲だ。しかしどれほどの犠牲だろうか?」「ソナムの恐怖の中で闘い、帰国した兵士」の犠牲と比べるが良い。「戦時において犠牲の完全な平等はありえない。しかしあらゆる人に、犠牲を捧げる覚悟を求めることはできる。」<sup>(40)</sup>

国民すべてが払うべき犠牲は、農業生産に限らない。「予備の労働力を動員する時が来た。物質的な資源の動員よりも、我々の成功のためには、生死を決するさらに重大なものだ。」「戦争目的のため、この国のあらゆる労働者の力すべてを動員する」必要がある。兵役についていない人々も、兵士と同じように犠牲を払わねばならない。労働力を動員することで、兵器弾薬の生産の人手不足に対処しなければならない、とロイド・ジョージは訴えた。<sup>(41)</sup>

アスキースへの言及でロイド・ジョージはこの演説を締めくくっている。「アスキース氏と別れることになった。それは私の人生で

最も無念な出来事の一つだ。」「私ほど氏の深い学識を尊敬している者はいない。私ほど氏に仕えることを喜んでいた者もいない。……辞任を申し出るべきだと感じた時、純粹な深い悲しみにくれた。」「しかしロイド・ジョージは決然と言い放つ。「だが個人的な考慮や党派的な考慮等、全く何の重要性もない瞬間がある。」「国際的な良心、強者に対する弱者の保護、強欲より正義が世界で支持されるという理念、……プロシヤの勝利は、これらすべてを押し流す。……戦争が始まってから、私の心には一つの政治目的しかない。そのために二心なく私は闘ってきた。人類の幸福を脅かす、かつてない凄まじい破壊から人類を救うこと、これである。」「それは、アスキースと彼に従う自由党の同僚への決然とした決別の辞であった。」<sup>(42)</sup>

#### 4 「保守反動には屈しない」

議会での初めての首相演説の後、ロイド・ジョージが最初に取り組んだ内政の重大な課題は、成人男子普通選挙権<sup>(43)</sup>と婦人参政権を柱とする選挙法の改正であった。アスキース首相によって1916年10月に設置されていた選挙法改正についての議長会議(Speaker's Conference on Electoral Reform)が検討を進めていた。首相就任直後の1916年12月14日、庶民院の議長は、選挙法改正問題の検討を進めるべきかどうか、早くもロイド・ジョージの意向を尋ねた。ロイド・ジョージは、然るべく前に進めるよう答えた。<sup>(44)</sup> 年が明けた1917年1月26日、議長会議は、大胆な選挙法改革を提言した報告を答申する。この報告は、有権者の財産資格の廃止、男子普通選挙権の実現、一定の年齢以上の婦人への参

政権の付与、複数投票 (plural voting) の制限、選挙の同日実施とともに、代替投票制 (Alternative Voting) や転換可能な比例代表制 (the single-transferable vote proportional method) の導入を提言する画期的なものだった。<sup>(45)</sup>

ロイド・ジョージは、投票の仕組みを比例代表制等に変えることについては懐疑的であった。だが婦人参政権と成人男子普通選挙については、国の防衛のために命をかけているすべての男女が、参政権を得るべきだという声が高まっていると考えていた。<sup>(46)</sup> 兄弟に当たった私信で、彼は「内閣の中で反対派を支持している保守反動には屈しない」<sup>(47)</sup>と記している。ロイド・ジョージは、過激な婦人参政権論者の戦術には批判的であった。だがアスキスとは違い、婦人参政権自体については当初から前向きであった。過激な戦術を展開する W.S.P.U. (婦人社会政治同盟) は、ロイド・ジョージの姿勢を消極的だと断じ、1913年2月、建設中の彼の自宅を爆破する暴挙に出た。しかし戦争が始まると、ロイド・ジョージは、爆弾攻撃に関わったパンクハースト (Emmeline Pankhurst) と共に募兵運動の演壇に登り、戦争への女性の協力を訴えた。そして軍需相として、銃弾の生産に不可欠な労働力として女性の動員に力を注いでいた。

回顧録の中でロイド・ジョージは、議長会議の答申は、戦前の自由党も「世間をあっと言わせる抜本的 (sweeping and sensational) 改革と見なしに違いない、と書いている。「保守党の最右翼、堅固な自由党員、進歩的な社会主義者」等、「最も多様な政治的見解を抱く人々の集まり」が「革命的な変化」を「全員一致で承認」した。このことは「自由を求める壮大な闘争が、全ての階級

を努力と犠牲の友愛で団結させたことが、世論に与えた変化の明瞭な証拠<sup>(48)</sup>である、と賛辞を捧げている。

もつともアスキス内閣で婦人参政権を積極的に論じていたのは、ヘンダーソン (Arthur Henderson) やロバート・セシル卿 (Lord Robert Cecil) だった、とされる。<sup>(49)</sup> 答申を受けた後も、投票制度の変革に消極的であったロイド・ジョージは、答申通り迅速に審議を進めるのを嫌い審議を積極的に進めなかったとも指摘される。<sup>(50)</sup> 実際ロイド・ジョージは、当初選挙法の改正が、早期の総選挙の可能性を摘んでしまうことに懸念を示していた。<sup>(51)</sup>

だが1917年2月6日には、戦時内閣は、議長会議の答申に沿って法改正を行うこと、婦人参政権については自由投票を行うよう庶民院に通告し、2月28日に庶民院での討論が始まった。ロイド・ジョージの回想録は、「選挙法改正への」反対は、基本的に保守の右派からであった。私はそれについて警告を受けていた。」と書いている。果たして3月8日には「100人の統一党の議員が署名」した選挙法改正に反対する首相宛の手紙が、海軍大臣を務めるカーソンから届けられた。

しかしロイド・ジョージは怯まなかった。「自分の内閣の一員である海軍大臣からの手紙には当惑した。しかし、それにもかかわらず、内閣の支持を得ることができた。」「手強い反対があったが、婦人参政権を含む」議長会議の提案の審議は進められ、3月26日には戦時内閣での決定が下された。<sup>(52)</sup> ロイド・ジョージは、反対派は少数に過ぎない、と見切っていた。「たった100人の議員しか抗議に署名しなかった。この事実、(保守党の多数派を含む) 庶民院の6分の5が賛同していることを証していた」と回想録

は振り返っている。<sup>(53)</sup>

3月28日には庶民院で「議長会議の答申に沿って速やかに法案を上程する」という決議が上程された。内閣と合意の上でこれを提案したのは、議長会議を設置した前首相アスキスであった。アスキスは、戦前婦人参政権に「執念深く反対」<sup>(54)</sup>（ロイド・ジョージ）してきた。しかしこの演説でアスキスは、はっきりと賛成に転じる。

まずアスキスは、議長会議が、困難な課題に取り組み、37の決議のうち34を全員一致で採択したことを称えた。この機会を逸することは、「犯罪的に愚かな行為」である、と断言する。アスキスによれば、自身が婦人参政権に反対してきたのは、「ただ純粹に（女性が参政権に）公的にふさわしいかどうか（public expediency）」という点に関わっていた。「女性は自分自身の救いを達成する」必要がある、と説いてきた。しかし「この戦争の間に、女性はそれをやり遂げた。女性なしに、どうやって我々は戦争を続けることができるだろう？」「女性は少なくとも男性と同じように、活発かつ効率的に」戦争に貢献した。それゆえ「私と同意見だった多くの者」も、「何らかの形で、婦人に参政権を授ける」という議長会議の多数派の「決定を承認する準備がある」と宣言した。このアスキスの転向は、「討論で最も劇的な事件」であったと、ロイド・ジョージの回想録は認めている。<sup>(55)</sup>

発言に立ったロイド・ジョージは、アスキスの演説に賛意を示した上で、「講和と戦後再建の問題を解決する」次の選挙で選出される議会は、「新しいイギリスを可能にするため力を尽くし、苦しんだ男と女を真に代表する」議会であるべきだ、と論じた。

彼が婦人参政権を「常に支持してきた。これを、庶民院は想起されたい。」と指摘した上で、「戦時の女性労働者の英雄的な愛国主義」が、婦人参政権を「はや」「抵抗し難いもの」としていること、また戦後直面する内政の課題は、女性が心から懸念する事柄であり、女性を「排除する議会」を選ぶことは「暴虐（outrage）」に他ならない、と舌鋒鋭く反対派を指弾した。<sup>(56)</sup>

審議の結果、アスキスが提案した決議は、賛成343、反対64で庶民院を通過。この決議に基づいた人民代表法案（The Representation of the People Bill）は、5月23日に331対42の大差で庶民院の第二読会（second reading）を通過し、委員会の審議を経て、婦人参政権の条項が6月19日に採決に付され、387対57で庶民院を通過した。労働党とアイルランド国民党が全員賛成票を投じたのは驚くに値しない。だが自由党の議員も9割以上が、統一党の議員も8割近くが賛成票を投じた。<sup>(57)</sup>一方比例代表制、代替投票制度については、さまざまな思惑から議論が交わされ、貴族院と庶民院との駆け引きも続いた。結局1918年2月に議会が認めたのは、21歳以上の男子普通選挙権と一定の租税を負担する30歳以上の女性の参政権に限られた改正であった。投票制度については、小選挙区の単純な相対的多数を勝者とする伝統的な仕組み（first-past the post system）が維持された。<sup>(58)</sup>しかし選挙法改正には、有権者の登録等の手続きが必要だった。このため既に二回延長されていた議会の会期は、まず1917年11月まで、次に1918年7月まで、そして更に8か月延長されて、1918年12月の総選挙を迎えることになる。<sup>(59)</sup>

かくて第四次選挙法改正は、複雑な投票制度の変革をめぐる果

てしない議論、人口の半ばを占める新たな有権者の選挙権登録、戦場で戦う兵士の選挙権の扱いといった山積する問題を乗り越え、1918年2月に制定にこぎつけた。重厚な伝統に囲まれたイギリス議会にあって、それは「革命的な変化」であった。ロイド・ジョージは、選挙法改正は議会自身の問題であり、政府法案ではない、として議会での発言を控えていた。<sup>(60)</sup>だが首相として反対派の抵抗を押し切って戦時内閣の方針を定め、審議を督励していたことは疑いを容れない。

ロイド・ジョージの回想録は、「戦時でなければ」貴族院がこうした法案を受け入れることは「全く不可能」だった、と統一党のボナー・ローが呟いたことを記している。平時なら「政党間の大きな争い」が起き、議会改革に反対する貴族院に民衆が激昂したに違いない、とボナー・ローは漏らしていた。時が違えば、この第四次議会改革は、1832年の第一次議会改革や、貴族院の拒否権に枠をはめた1911年の議会議法の制定時に匹敵するような、庶民院と貴族院の抗争、新たな憲政危機（Constitutional Crisis）を誘発させるのではないか。保守陣営のリーダーがこれを予感していたことが伺われる。

だが保守陣営も、戦火の下で国民を分裂させる政治的危機は起こせなかった。ロイド・ジョージは、「国内の平和」を利用して「偉大な進歩」を成し遂げたことに満足の意を示している。ロイド・ジョージの見るところ、この選挙法改正は、「1832年の第一次議会改革以来の最大の前進」に他ならない。「我々は自分達が民主国家だと長く自称してきた。しかしこの方策が議会を通過するまで、議会の代表は本当に民主主義的な基礎に基づいて選ばれ

ている、と称することはできなかった」と歴史的な成果を謳いあげた。<sup>(61)</sup>

総力戦を推し進めることを唯一の目的として、ロイド・ジョージの戦時内閣は造られた。だが強大な権力をもって国民を戦争に駆り立てたこの政権は、全国民を根こそぎに動員するため、国民大衆を総力戦の体制に組み込むのに不可欠な方策だとして、男子普通選挙権と婦人参政権を押し立てた。そして自由党の中の反対派はおろか、貴族院に盤踞する統一党の抵抗を沈黙させた。英雄の屍の前に結束した「新しいイギリス」の下、民主主義は飛躍を遂げる機会を手にした。マーティン・ピュー（Martin Pugh）の言うように、それは総力戦がもたらした「逆説」であった。<sup>(62)</sup>

## 5 結びに代えて

盟友アスキスと袂を分かち、自由党のオールド・ガードと決別すること。それは、総力戦を遂行する国家権力を創出するのに避けることのできないステップだった。国家権力のかつてない膨張は、自由主義の伝統からかけ離れたものだったからである。結果的にそれは、自由党の大分裂を招く。総力戦の論理に従うロイド・ジョージの突破力を評価したのが保守陣営であったことは偶然ではない。総力戦の信念に殉じて自らの属する党の分裂も厭わなかったロイド・ジョージ。その姿に1886年、アイルランド自治（Irish Home Rule）に反対して自由党を割り、保守党と合流して自由党を深い低迷の淵に突き落としたジョゼフ・チェンバレン（Joseph Chamberlain）の姿を重ねることは、決して奇異なことではない。



しかしロイド・ジョージの権力奪取によって登場した戦時内閣は、より機動的で効率的な政府を構築し、イギリスの勝利を近づけた。イングリランドにかつて征服された小国ウェールズからやってきた平民宰相、政界の「アウトサイダー」は、自由党が拘ってきた「小さな政府」の理念や、議会と内閣が纏ってきた「紳士のクラブ」の装いをかなぐり捨て、総力戦に立ち向かう強大で非情な装置に置き換えた。誕生した戦時内閣は、前例のない産業の国家管理の拡大を推し進め、戦争のために必要な土地建物を徴発し利敵行為を厳格に取り締まる「王国防衛法」(Defence of the Realm Act)に守られながら、巨大な変革を推し進めた。庶民院のリーダーを別に置くことで、首相は洗練された討論の場の運営からも距離を置いた。グリッグやモーガン(K.O. Morgan)が認めるようにロイド・ジョージ政権は、イギリスにはかつて存在しなかった「大統領制に準じる(semi-presidential)」性格を帯びた。<sup>(64)</sup>それは戦時におけるイギリスの政府の前例となり、やがてナチスと死闘を繰り広げるチャーチルもこの例に倣った。

しかしロイド・ジョージ率いる連立政権は、1910年の総選挙によって選ばれた庶民院の多数の支持を背景にしていた。従って「命令する権力」という言葉を使っていたものの、民主主義を蹂躪した「独裁(dictatorship)」と言ふことは至当ではない。事実、自由党の半数は政権を支持していなかった。議会での批判が圧殺されたわけでもなかった。とはいえロイド・ジョージの連立政権は、選挙の洗礼を経て国民から信任を得ていたわけでもない。1910年の総選挙で信任を得ていたのは、あくまでもアスキスを党首とする自由党の前政権であった。それゆえロイド・ジョー

ジ自身も、議会の信任を失えば、総選挙を行う可能性を排除してはいなかった。実際には膨大な数の兵士が命を賭して闘っている最中に選挙を行うことは、現実的ではなかった。<sup>(65)</sup>しかしロイド・ジョージの強大な権力は、非常時ゆえに、議会の会期を繰り返して延長することで、認められていたに過ぎなかった。

もともとロイド・ジョージは、国家権力を膨張させただけではない。彼の弁舌の焦点は、国民大衆、労働者や女性を総力戦の能動的な担い手、その主役として組み入れることに置かれていた。本稿でとりあげた労働党の代表団への演説、首相としての議会での演説は、雄弁にそれを物語っている。ロイド・ジョージが首相就任後取り上げた最初の課題の一つも、「新しいイギリス」の担い手に選挙権を授けることであった。「人民のチャンピオン」として築き上げた名声と、磨き上げた雄弁を梃子に、ロイド・ジョージは戦時下の大衆の懷に飛び込んだ。自由党の半分を失ってぐらつく政権の足元を、労働者を抱き込み女性を取り込んで安定させ、犠牲の平等を謳いながら、国民総動員の実をあげようとした。死に物狂いで戦うリバイアサンに、ポピュリズムの力を注ぎ込み、新たな血液を供給した。その結果、イギリスの民主主義は、画期的な選挙法改正を手にする事となる。

しかしこの陸の怪物の前途には、なお幾多の困難が待ち受けていた。自分の党を持たないロイド・ジョージの足元は、決して堅牢ではなかった。戦時内閣は、あくまでも統一党と労働党との連立政権であり、戦時内閣に自由党員は彼只一人だった。ロイド・ジョージは、自分は「保守陣営に取り囲まれた急進派の裏切り者」だ、と自嘲している。<sup>(66)</sup>彼には軍の戦略や戦術、人事を動かす力も無

きに等しかった。「戦争に勝った男」として総選挙で戦うためには、更なる魔術が必要だった。

## 注

- (1) アスキスはイギリスの伝統的な政治的支配層である土地貴族ではなかった。だが彼はオックスフォード大学を経て法廷弁護士(Barrister)となり、上流階級の妻を娶っていた。一方ロイド・ジョージは、ウェールズの靴職人の息子で、大学教育も受けたことがなく、事務弁護士(Solicitor)に過ぎなかった。アスキスは時折ラテン語を引用して、ロイド・ジョージを煙に巻いたとされる。
- (2) 「革新主義同盟」については、さしあたり Peter Clarke, *Lancashire and New Liberalism* (Cambridge, 1971) に始まるピーター・クラークの一連の研究を参照。これをめぐる論争に触発された筆者自身の選挙史研究については、後に掲げる拙稿を参照されたい。
- (3) A.J.P. Taylor (ed.), *Lloyd George: a Diary by Francis Stevenson* (Hutchinson, 1970) p. 56, 2 September 1915.
- (4) 拙稿「総力戦の修辭字——ウェールズの魔術師」と『新しいイギリス——』(『アルテス・ムンディ』、名古屋外国語大学ワールド・リベラル・アーツセンター第7号、2022年3月所収)でも指摘したように、1918年総選挙の歴史的意義については、異なった見解がある。筆者は、巨視的にみて1918年総選挙は、自由党の不可逆的な凋落の始まりとなったと捉えている。自由党の分裂は、その序曲であった。第一次大戦期の補欠選挙や、1918年総選挙についての筆者の実証的な分析の試みとしては、拙稿「第一次大戦下の補欠選挙 1915—1918——総力戦の衝撃——」(『英米研究』第38号、大阪大学英米学会、2014年所収)、「第一次大戦下のサルフォード北補欠選挙と自由党の衰退」(『英米研究』第39号、大阪大学英米学会、2015年所収)、「1918年総選挙と自由党・労働党——一人区における政党の対決の構図」(『英米研究』大阪大学英米学会、第40号、2016年所収)、「1918年総選挙と自由党・労働党——二人区における政党の対決の構図」(『英米研究』大阪大学英米学会、第41号、2017年所収)、「自由党の分裂と労働党——1918年総選挙二人区の戦況」(『英米研究』大阪大学英米学会、第42号、2018年所収)、「1918年総選挙二人区における自由党と労働党——労働党が議席を獲得できなかった選挙区——」(『英米研究』大阪大学英米学会、第43号、2019年所収)、「1918年総選挙一人区における労働党の戦績」(『英米研究』大阪大学英米学会、第44号、2020年所収)等を参照。本稿は、こうした実証的な分析を踏まえつつ、1918年総選挙研究の一環として、戦時中のロイド・ジョージの政治宣伝を考察しようとするものである。
- (5) 本稿では、イギリス議会の議事録 *Hansard* に残されたロイド・ジョージの議会での演説およびロイド・ジョージの回想録 Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 1, Volume 2 (Odhams Press, London, 1938) に収録された彼の弁舌を取り上げる。また必要に応じて K.O. Morgan (ed.), *Lloyd George Family Letters, 1885–1936* (Oxford University Press, 1973) や秘書で愛人であったフランシス・ステブンソン (Frances Stevenson) の日記 A.J.P. Taylor (ed.) *Lloyd George: A Diary* (op. cit.) 等を参照する。
- (6) 保守党はこの時期「アイルランド自治に反対し自由党から分裂した自由統一党 (Liberal Unionists) と事実上一体となって、第一次大戦後アイルランド自由国が誕生する頃まで「統一党」(Unionists) と一般に呼ばれていた。今日でも保守党の正式名称は「Conservative and Unionist Party」である。
- (7) 軍需省の創設と帝国参謀総長 (Chief of the Imperial General Staff) の任命によって、軍政と作戦両面において陸相の権限は縮小されていた。陸相となったロイド・ジョージは、自分を「動物を屠殺場に連れていく屠畜業者の少年」のようだと呼んでいた。Wilson (ed.), *The Political Diary of C. P. Scott 1911–28* (Collins, 1970), p. 218.
- (8) 1916年後半に入ると、アスキスは体力気力とも衰え、飲酒が精神と身体を蝕んでいた。John Grigg, *Lloyd George: From Peace to War 1912–1916* (Methuen, 1985) pp. 437–438.
- (9) Ibid., p. 443. 11月13日のエイキン (Aikm' 後のビーバブルック卿 Lord Beaverbrook) との会話の中の言葉。Lord Beaverbrook, *Politicians and the War* (Butterworth, 1928), ch. XXV.
- (10) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 1, op. cit., pp. 591–595.

- (11) アスキスは、ロイド・ジョージの組閣は失敗し、自分が再び組閣を託される展開になることを期待していた」とグリッグは考えている。John Grigg, *Lloyd George: From Peace to War 1912-1916*, op. cit., p. 469.
- (12) *Ibid.*, p. 468.
- (13) 自由党が議会で多数を占めていたため、統一党が単独で組閣することは困難だと考えられていた。
- (14) John Grigg, *Lloyd George: From Peace to War 1912-1916*, op. cit., p. 476.
- (15) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 1, op. cit., p. 609.
- (16) Roy Hattersley, *David Lloyd George* (Little Brown, U.K., 2010) p. 418.
- (17) John Grigg, *Lloyd George: From Peace to War 1912-1916*, op. cit., p. 476.
- (18) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 1, op. cit., p. 633.
- (19) *Ibid.*, p. 626.
- (20) *Ibid.*, p. 627.
- (21) *Ibid.*, p. 627.
- (22) *Ibid.*, p. 628.
- (23) *Ibid.*, p. 629.
- (24) *Ibid.*, p. 630.
- (25) 1980年代に労働党の副党首を務めたロイ・ハトゥスリー (Roy Hattersley) は、こうした一連の国家管理、国有化の拡大は、戦時内閣の一員だったミルナー (Lord Milner) が提唱していた「戦時社会主義」 (War Socialism) とどうべきものであったと捉えている。ただしそれはあくまでも戦争に伴う一時的な必要悪と捉えられていた、とハトゥスリーは言う。Roy Hattersley, *David Lloyd George*, op. cit., p. 482. 他方、マーティン・ビューは、労働運動の側では戦時経済の国家管理の拡大をめぐって、二つの見方があったことを指摘している。一方ではウェップ (Sidney Webb) のように、これを戦後の労働党綱領に繋がる社会主義への前進として歓迎する見方があった。他方コール (G.D.H. Cole) のように労働者の参加を重視する立場から、戦時の国家管理の拡大を警戒する見方があり、両者は鋭く対立していた。Martin Pugh, *Speak for Britain!* (Vintage, 2011) p. 111.
- (26) A.J.P. Taylor (ed.), *Lloyd George: Diary by Francis Stevenson* op. cit., p. 134.
- (27) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 1, op. cit., p. 632. 回想録は、この会合で、ロイド・ジョージが、労働党の代表の質問に対して、講和の協議には労働党も当然加わること、大新聞も労働者の新聞も公平に扱うこと、ドイツのような軍国主義は、戦後のイギリスに存在してはならないこと、戦争が終われば徴兵制は撤廃されること、イギリスでは黒人労働者の導入の計画はないこと等を丁寧に応えていたことを記している。戦時内閣が独裁ではないかという質問もあったが、これについては次節で触れる。
- (28) John Grigg, *Lloyd George: From Peace to War 1912-1916*, op. cit., p. 500.
- (29) *Ibid.*, p. 499. Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 1, op. cit., pp. 626-632.
- (30) *Ibid.*, p. 634.
- (31) *Ibid.*, p. 643. それまで内閣の会議には秘書官は加わっていなかった。国王への首相の報告だけが議事の記録であった。ロイド・ジョージの回想録は、アスキスやキャンベル・バナマン (Henry Campbell Bannerman) 元首相が、例外的な場合以外、閣議のメモを取っていたことは記憶になく、こうしている。
- (32) *Hansard*, 19 December 1916, fifth series, vol 88, c. 1338.
- (33) *Ibid.*, c. 1340.
- (34) *Ibid.*, c. 1341.
- (35) *Ibid.*, c. 1342.
- (36) *Ibid.*, c. 1343.
- (37) *Ibid.*, c. 1344.
- (38) *Ibid.*, c. 1345.
- (39) *Ibid.*, c. 1346.
- (40) *Ibid.*, cc. 1348-1349.
- (41) *Ibid.*, cc. 1350-1351.
- (42) *Ibid.*, cc. 1356-1357. なおロイド・ジョージの演説に対して、野党席からアスキスは、自らの実績を強調しつつも、戦時にあつては政党の対立は存在しないとして、ロイド・ジョージ政権の誕生を祝した。この時点では、自由党両派が和解できる可能性はなかったと言い難い。しかし翌1918年5月、ロイド・ジョージの議会での発言を批判したモーリス (Major-General Sir Frederick Maurice) の手紙が、タイムズ等各紙の紙面を飾った。この事件がその芽をつむことになる。直近まで陸軍省の作戦部長 (director of military operations) を務めていたモーリスの批判を、ロイド・ジョージへの正面からの攻撃を控えていたアスキスが議会で

取り上げた。これを契機に自由党の分裂は、修復不能なものとなる。なおロイド・ジョージの首相としての議会での最初の演説に対してアスクイスに続いて立ったアイルランド国民党のレドモンド (John Redmond) は、イースター蜂起の首謀者への厳しい処断を念頭に、ロイド・ジョージがアイルランド自治の約束を踏みについたという批判を展開した。この批判は、大戦後燃え上がるアイルランド独立戦争を予兆させるものであった。

- (43) 第三次選挙法改正は、決して男子の普通選挙権を実現したものではなかった。複雑な選挙権の規定や登録の手続きが、雇用主の寮や親の家に住む独身者や引越しの多い労働者を排除しており、それは成人男子の40%にも及んでたと推計されている。Martin Pugh, *The Making of Modern British Politics: 1867-1945 3rd Edition*, Wiley-Blackwell: 2002, pp. 7-10.

- (44) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 2, op. cit., p. 1166.

- (45) 提言の全文は、Martin Pugh, *Electoral Reform in War and Peace 1906-18*, London, 1978, pp. 192-193.

- (46) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 2, op. cit., p. 1166.

- (47) George William, *My Brother and I*, 30 March 1917, p. 258.

- (48) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 2, op. cit., pp. 1166-1167. ただしこの表現は誇張されている。ロイド・ジョージ自身も認めているように、現実には婦人参政権は多数派報告に過ぎなかった。しかも反対の委員が途中で退任し、婦人の有権者の数が男の有権者数を上回るのを怖れる委員をなだめるために婦人の資格に制限を付ける妥協によってようやく採択された。Martin Pugh, 'Politicians and the Women's Vote 1914-1918', *History*, Vol. 59, 1974, p. 364.

- (49) Martin Pugh, 'Politicians and the Women's Vote 1914-1918', op. cit., p. 362.

- (50) 比例代表制を取り上げなかったロイド・ジョージにクリックスは批判的で、ロイド・ジョージが2か月間、選挙法改正の採択を躊躇していたと考えている。John Grigg, *Lloyd George, War Leader 1916-1918*, op. cit., pp. 106-107.

- (51) Martin Pugh, *Electoral Reform in War and Peace 1906-18*, op. cit., p. 91.

- (52) ただし戦時内閣の決定は、婦人参政権は法案に含まれるべきだとしつつも、修正の余地を残しており、比例代表制については、議長会議に再

考を促すという付帯条件がつけられていた。Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 2, op. cit., pp. 1170.

- (53) *Ibid.*, pp. 1169-1170. 反対派の文書は、根本的な選挙法改正は時宜を得ておらず、現在の議会は、戦争遂行のためだけに会期を延長されており、選挙法改正にとりくむ権限がない、また改正に必要な十分な調査がなされておらず、アイルランドも対象となっていないといった論点を提示していた。

- (54) *Ibid.*, p. 1171. アスクイスは1905年以前から一貫して婦人参政権に反対していた。

- (55) *Ibid.*, p. 1171.

- (56) *Ibid.*, p. 1172. ただし比例代表制については、いつでもロイド・ジョージは選挙権や議席再分配を定める法律の「欠けたところのない一部」ではないとし、判断は庶民院に委ねる、としていた。

- (57) Martin Pugh, 'Politicians and the Women's Vote 1914-1918', op. cit., p. 369. 各採決の数は「ニュー」に従っている。

- (58) Martin Pugh, *Electoral Reform in War and Peace 1906-18*, op. cit., pp. 155-167. 貴族院は、比例代表制を採用し、代替投票制は潰瘍を望んでいたが、結局は、従来の方式の維持に落ち着いた。

- (59) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 2, op. cit., p. 1170.

- (60) Martin Pugh, *Electoral Reform in War and Peace 1906-18*, op. cit., p. 99.

- (61) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 2, op. cit., pp. 1173-1174.

- (62) Martin Pugh, 'Politicians and the Women's Vote 1914-1918', op. cit., p. 374.

- (63) K.O. モーガンは、ロイド・ジョージ政権は「戦前の政党政治を捨て去り「新しい水準の効率的で愛国主義的な統合」「国民的結束の創出」を産み出した (The Invention of National Unity) と論じている。K.O. Morgan, *Consensus and Disunity: The Lloyd George Coalition Government 1918-1922*, Oxford University Press, 1979, p. 17.

- (64) K.O. Morgan, *Twentieth-Century Britain: A Very Short Introduction*, Oxford University Press, 2000, p. 11.

- (65) Lloyd George, *War Memoirs*, Volume 2, op. cit., p. 1164.

- (66) George William, *My Brother and I*, op. cit., p. 258.